

水の思い出 ⑦②

安龍ヶ滝との出会いは、今から十数年前でした。木漏れ日に輝く紅葉の中の細い道を進んでいくと目の前に滝が。「秘境に来たみたい。こんな素敵な所が、こんなに近くにあったなんて」その思い出が強く残って、もう1度行きたいと思っていました。そうこうしているうちに、震災があり、もういけないと聞いてがっかりしていました。

昨年、地域おこし協力隊の方を含め4名で安龍ヶ滝を目指す機会に恵まれました。荒れてしまっていて辿り着くのは大変でしたが、2度目に待っていたのは、全面凍った滝!!!

私はすぐ氷の厚さを確認しながら、滝つぼへ。そして氷壁に耳をあてました。氷の下を流れる水の音の美しいこと!! 体全体を包み込むような美しい音と、辺り一面にマイナスイオンが漂い、精気に包みこまれました。思わず ファ~~~~~

~~~~~!

その日は、氷の奥から聞こえた音が、一晩中、私を包んでくれて、何ともいえない気分でした。

厳寒の滝との2度目の出会いは、私にとってさらに忘れられない思い出になりました。道がまだ復旧されていないので、皆さんにお勧めできないのが残念です。

(Noriko)



「安龍ヶ滝」(上宮河内町)



# 常陸太田の神社と狛犬

人々の暮らしや信仰と結びついて来た神社。どの神社にも独自の歴史がありますが、社殿の前に鎮座している二頭の狛犬や建物等にも特色があります。興味深い狛犬や社殿、鎮守の森の植生を紹介します。  
(安嶋 隆、黒澤貴子、高橋靖浩、武藤 卓、五十嵐弘)

## ● 狛犬って？

本来は、向かって右側が口を開けた「阿形像」<sup>あぎょう</sup>で獅子。左側が口を閉じた「吽形像」<sup>うんぎょう</sup>でツノがある狛犬です。なぜ、そのようになったのかは解りませんが、時代とともに「阿形像」「吽形像」ともに獅子像を設置し、どちらも「狛犬」と呼ぶようになりました。しかし、現在でもいくつかの神社では「阿形像」に獅子、「吽形像」にツノがある狛犬を設置している神社があります。常陸太田市内では見かけませんが、近くでは水戸市の護国神社が「阿形像」に獅子、「吽形像」に狛犬（ツノがあります）を設置しています。

## ● 常陸太田市内の狛犬



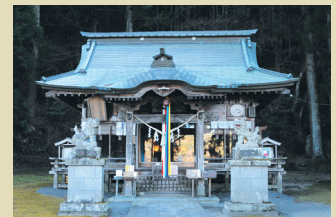
### いわふね 岩船神社 (下河合町)

新幸久橋の左岸側のたもとにある岩船神社。バイパス沿いにあるので、ご存知の方は多いのでは。バイパス工事の関係で移築された新しい社殿の前に鎮座する狛犬は、どこかモダンな風情があります。又、阿吽像の姿形が結構違ってきます。



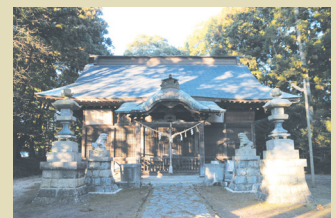
### おおなか 大中神社 (大中町)

旧道沿い、里美支所の少し奥に在る大中神社の狛犬は、前足が太くとても力強い骨太な狛犬さんでした。



### さつと 薩都神社 (里野宮町)

表情と体型からは純朴さと優しさが伝わってきます。阿形像に比べると吽形像の方が色が薄いのは？です。

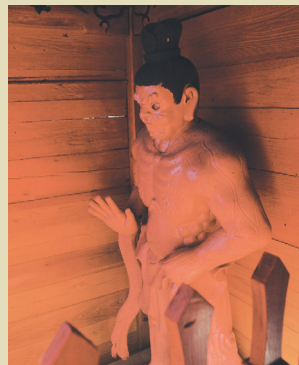




たきゅう  
武生神社 (下高倉町)

山深い神社にあるのですが、どこかモダンな阿形像と吽形像です。長い階段を上ると山門があり、鮮やかな阿形と吽形の仁王像があります。これは神仏習合の名残なのでしょう？阿形像の脇の小さな狛犬がなんともユーモラスです。社殿奥の壁には鮮やかな絵が描かれています。

深山にある武生神社には、モダンで鮮やかでありながらも、神仏習合の名残を残す不思議な空間があります。



にしかな  
西金砂神社 (上宮河内町)

曲線主体で頭が小さい狛犬さんは、とても勇猛な雰囲気でした。

又、西金砂神社では、以前にあった隋神門に16体の獅子頭が設置されていましたが、そのうち10体はいつでも見ることができますが、残りの6体は保管してあるそうです。どれも違う表情で、それぞれに受ける印象が違います。一見の価値があると思います。

16体の獅子頭は、現在の坂東市の後藤殿之助の作です。隋神門は明治35年秋の大暴風雨によって倒壊し、現在はありません。





たかふさ  
**鷹房神社** (小目町)

長い階段を登った先、社殿の前に鎮座する曲線貴重な阿形像と吽形像。とてもゴージャスで美しく力強い狛犬さんでした。



ひがしかなさ  
**東金砂神社** (天下野町)

武者絵の中から飛び出てきたような狛犬で、優美さと力強さを感じ、一般的な狛犬のイメージに近い狛犬さんではないでしょうか。

又、県道沿いにある東金砂神社の鳥居は木製ですが、今回の取材でこれほど大きな木製の鳥居は他に確認できませんでした。



よしだ  
**吉田神社** (町屋町)

吉田神社の狛犬は地元の彫刻師の方が町屋石を彫って作成した狛犬です。阿形像の口の中には小さな玉があります。たてがみが長くなびいている様はどこか女性的で可愛らしく、他の神社の狛犬とは雰囲気は全然違います。

台座には昭和4年に根本龍岳さんによって彫られた記録が残されていました。取材時に宮司さんと氏子さんがいらっしゃって、彫刻師が地元の方であることと阿形像の中の小さな玉について教えていただきました。



◀ 口の中の玉です

今回は、紹介しきれませんでした。八幡宮、若宮八幡宮、諏訪神社にも興味深い狛犬像があります。又、真弓神社の対の猿像や、2頁で紹介した水戸市の護国神社のツノがある狛犬も一見の価値があると思います。

# ● 大子町の狛犬



## にこう 二荒神社 (大子町)

神社に鎮座しているのです、狛犬であることに疑いは持ちませんが、別の場所にあったならばはたしてどうでしょうか？しかし、なんともユニモラスな狛犬さんです。脇の石に嘉永三年（1850年）と刻まれているので、その頃に造られた狛犬なのでしょう。お隣の太子町の狛犬さんですが、なんともユニークな狛犬さんなので紹介させていただきました。



## 鎮守の森は緑の文化財

鎮守の森は神社を囲むように太古の姿を残している森林で、現在でも大切に守られています。これらの森は生物多様性に富み、緑の文化財として注目されています。

森を構成している樹木は多くの種類があり、全体の姿から区別できにくいのですが、樹皮と葉の形で見分けることができます。鎮守の森を構成している代表的な樹木を紹介します。（安嶋 隆）



カゴノキ (クスノキ科)



サカキ (ツバキ科)



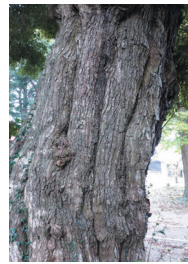
シラカシ (ブナ科)



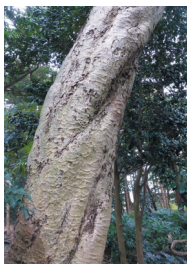
シロダモ (クスノキ科)



スギ (ヒノキ科)



スダジイ (ブナ科)



タブノキ (クスノキ科)



ヒサカキ (ツバキ科)



ヤブツバキ (ツバキ科)

# 鳥居の うんすく

神社といえば、鳥居を真っ先に思い浮かべる方が大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。最近「パワースポット」ということばを聞きますが、なんといっても神社は身近なパワースポットです。その神社を象徴する建物、鳥居について少し説明いたします。

(武藤 卓、五十嵐 弘)

## 鳥居とは

人が住む領域と神様の領域を区分けする象徴です。鳥居から内側が神様の領域であることを示しています。ちなみに、鳥居は1基、2基と数え、外側の鳥居から一の鳥居、二の鳥居と呼びます。

### ●素材

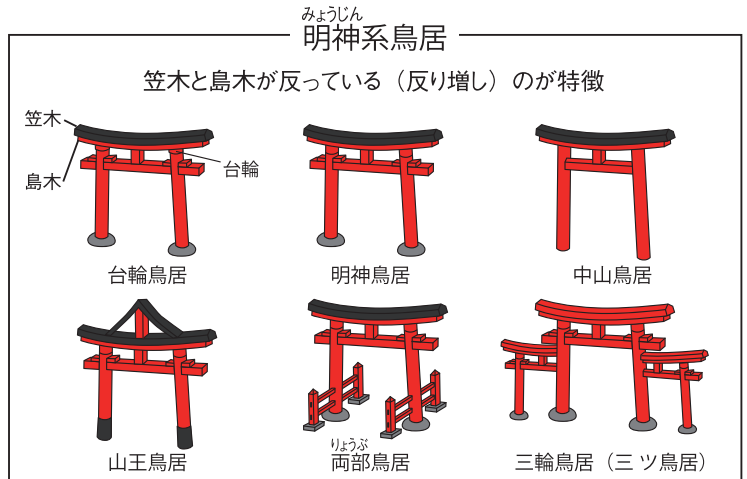
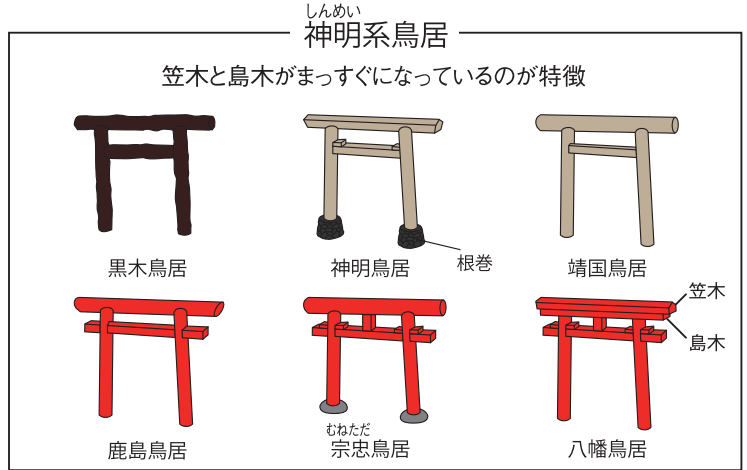
木製(原木)の鳥居が始まりだという説があります。やがて皮を剥いた原木を使い、その後は製材した木材を使用したり、石材を利用した鳥居も作られるようになりました。現在は、鉄筋コンクリート製、鋼製、塩化ビニール製の鳥居もあります。

### ●色

元々は着色することなく、その素材の色であったという説が通説です。色が塗られた鳥居といえば、稲荷神社の朱色の鳥居が有名で、赤く塗られた鳥居をよく見かけますが、いつ頃からどのような意味で朱色に塗るようになったのかは不明です。

### ●形式

図のようにわかっているだけでも10種類以上の形式があります。ご近所の神社の鳥居やいつもお詣りする神社の鳥居の形式名を調べてみてはいかがでしょうか。



# 人種継の会

7

常陸太田で昔から作られている豆を調べた所、12種類くらい出てきました。ダイズ種、アズキ種、ササゲ種、インゲンマメ種、ラッカセイ種に分かれます。名前も面白く、金砂郷在来青御前、里川晩豆、おんめさん豆、娘来た、珍々豆、昔っからの豆、等々、地名や人の名前をはじめとして、首を傾げるような名前など様々です。これらの地豆は地域や家々で細々とつくりつがれてきています。風土に合っていて、味がよいので作り続けられていると思われま

す。しかし、現代の大規模栽培には不向きなため、あまりひの目を見ることはありません。そんな在来の豆の中から、今回の“ファーム&キッチン常陸太田”で、“娘来た(小豆)”を食材に取り上げていただけることになりました。嫁いだ娘が実家に帰省してから豆を煮始めてもすぐに煮えるという意味から「娘来た」というそうです。一度聞くと忘れられない名前ではないのでしょうか。常陸太田市内のレストランやケーキ店のオーナーさん達が腕をふるって作ってくれる豆のメニューの数々をお楽しみに! なお、今回で私たち「種継人の会」の連載は終了となりますが、引き続き活動は継続、会員も募集しています。短い期間でしたがお読みいただきありがとうございました。

(北山 弘長)



おんめさん豆 バンダ豆 里川晩豆 娘来たか 娘来た 金砂郷在来青御前

リレー  
エッセイ 『思い出の絵本』

『わたしとあそんで』

～72～

(久米町 佐竹 和子)

私がこの本に出会ったのは、短大の児童文学の時間でした。親元を離れ、初めての寮生活、慣れない生活のさびしさの中で聞きました。先生のやさしい声、シンプルな淡い色合いの線描画の絵。引き込まれるように聞き入っていた私がありました。

物語は小さな女の子の“わたし”が原っぱに遊びに行くところから始まります。「ばったさんあそびましょ」

出会ったばったに声をかけ、つかまえようとします。しかしばったは逃げていってしまいます。かえるやうさぎ達にも声をかけますが、みんな逃げていってしまいます。

誰もあそんでくれないので、“わたし”はじっと池のほとりに座っていました。すると逃げていったばったが戻ってきました。それでもじっとしていたら…

ここから先は絵本を読んでみてください。ゆったりとほんわかするように読んでみてください。きっと、“わたし”のうれしさを一緒に感じるができると思います。私はいつ読んでも、心が温かくなります。

この絵本は子ども達だけではなく、ちょっと疲れた大人の人にこそ読んでほしい一冊です。私はじっと待つということの大切さを、この絵本から学んだような気がします。この忙しい時代だからこそ、無くしてはならない大事なことなのではないでしょうか。

ゆっくり、ゆっくり。たまにはそんな時間があってもいいと思いませんか？



ほつ  
とひといき  
マンリョウ・万両(ヤブコウジ科)



茎は直立し、高さ1m前後まで成長することもあります。市内各地の照葉樹林内や竹林に自生し、庭にもよく植えられています。7月頃に約1cmの白い花を多数つけ、晩秋～冬には赤く熟します。江戸時代から栽培されており、多数の園芸品種があります。

赤い実をつけるので正月用の縁起木として親しまれています。マンリョウの他、千両(センリョウ・センリョウ科)、百両(カラタチバナ・ヤブコウジ科)、十両(ヤブコウジ・ヤブコウジ科)、一両(アリドオシ・アカネ科)なども赤い実をつけるので同様に縁起物として知られています。このうち市内ではカラタチバナとヤブコウジの2種類が生育しています。

一方、アメリカに渡ったマンリョウは現地で増えすぎて、厄介者扱いされているそうです。生育地が違ったために生活様式が異なり人間からは思わぬ扱いを受けている植物です。

(安嶋 隆)

ちよつとひといき  
「じょうづるさんどら焼き」

ちまきでおなじみの鍋屋さんのもう一つの人気和菓子に「竹炭どら焼き」という、皮も中の餡も真っ黒などら焼きがあります。お客様から「これは、丸くて真っ黒で、まるでじょうづるさんの顔みたい♪」と声があり「常陸太田市の子育て支援の役に立てば」と鍋屋さんとパッケージを検討し、できあがったのがこの「じょうづるさんどら焼き」です。常陸太田の新しい手土産に、またご出産のお祝い返しなどにぴったりだと思いませんか！



- 1個130円 3個入箱詰500円 他
- 東三町2162-1 電話72-0348
- 木曜定休

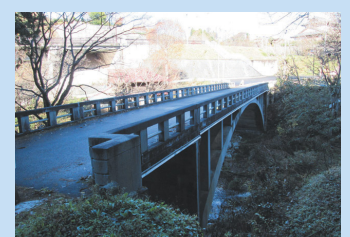
常陸太田の地名話 ～18～  
どうめき  
百目木 【常陸太田市天下野町百目木】

川にまつわる地名には、川や泉などの他にドウメキ、ナメといった様々な名まえがある。加藤寛斎が書いた『常陸国北郡里程間数之記』には、山田川は水府の中染から天下野の境にかけて渓谷をなしていて、ドウメキと呼ばれていると記されている。天下野側の集落の名まえも百目木となっている。山田川の急流を、ドウドウと轟音をたてて水が流れることが、地名のことばにリアルに表現されている。なぜ百目木と記すかについては、二つの説がある。一つには百目木(鬼)とは守護獣のことで、聖山を守るけものを表す。百目木のあたりは東金砂山の麓の集落で聖山を守る地域。二つには「とう」と「とう」十と十が二つ重なるので百。目木は接尾語「めく」の活用形。つまり、水がドウドウと音をときめかせて流れているさまを表すという。この二つの説とも的を得ているような気がする。

(川松 博)

<参考文献>

「常陸国北郡里程間数之記」「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」「水府村史」



山田川にかかる永久橋  
(以前は百目木橋といった)

# 新太田点描 10

## 俳人・尾花庵方居おばなあんほうきよ

松尾芭蕉は江戸時代を代表する俳人の一人であり、全国各地に数多の門人を擁していた。芭蕉の没後に門人たちは、それぞれの地元で芭蕉の偉業を偲んで同好者を募り、俳句結舎を創設・運営するなど自己研鑽と普及活動を展開していた。

太田町を拠点として活動した俳句結舎「尾花庵」も然りである。太田から江戸に出て俳句を嗜んでいた武弓亀文は、ふとした偶然から芭蕉の使用していた文机（文台）を入手し、これを同郷の小澤九郎兵衛に贈った。

そこで以前から文雅の嗜みのあった九郎兵衛は、文机に芭蕉の自筆で書かれていた『ほととぎす招くや麦のむら尾花』の文言から採って、「尾花庵」を立ち上げて初代庵主となった。九郎兵衛は俳号を芝六と称し、地元太田町及び近在近郷で俳句に興味や関心を持つ仲間と定期的に句会を催した。

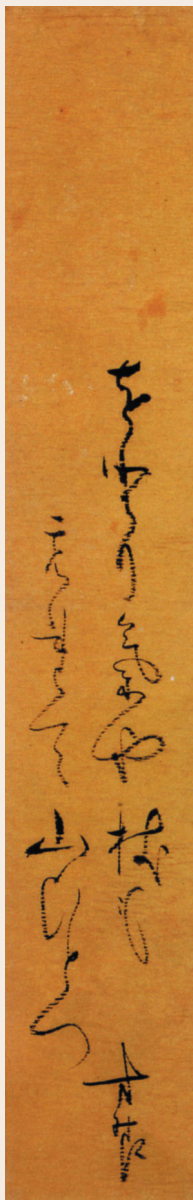
尾花庵主は初代芝六に始まり、二代小澤山東（多仲）―三代立川一徑―四代勝村方居―五代矢吹一長―六代沼尻河昇―七代中郡睦雄―八代石川右遷―九代川上東里―十代長谷部如風と、芭蕉遺品の文机は歴代の庵主によって連綿と引き継がれてきたが十代如風で途絶えている。

さて四代勝村方居であるが、彼の居宅が東中（現・東二町）の角にあったので「方居」と号し

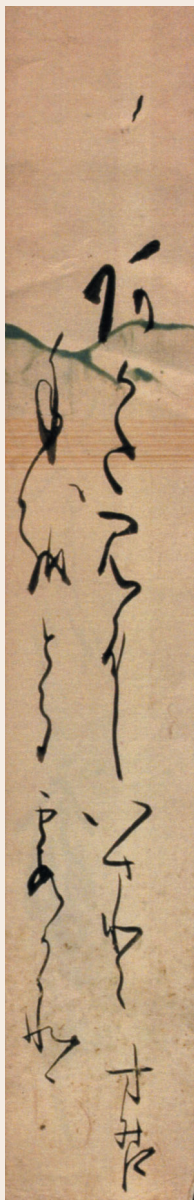
たと云う。方居が尾花庵四代を継承した時期は判然とはしないが、三代立川一徑は文政十二年（一八二九）九月に死去している。  
この間、文政五年（一八三二）九月十三日の夜に始まり、翌年五月まで催された句会の草稿綴りには、方居の序文が認められているので、恐らくはこのころ既に尾花庵主の座を引き継いでいたであろう。文久二年（一八六二）十一月九日死去。墓石は法然寺にあり「方居先生之墓」とあるが、

享年の刻みがないので年齢は不詳である。同寺の過去帳には「尾華庵栄誉方居信士、東中、勝村徳兵衛父太助コト俳人ナリ」とあり、やはり享年の記載はない。  
さて今回は左に方居の自筆短冊四点を紹介する。俳人らしくとても個性豊かな特徴のある筆跡である。試みに一句だけ読みを添えてみたが確信はない。読者のご教示を乞いたい。  
（吉成英文）  
をとり気や 杖も忘れて 山ひとつ 方居

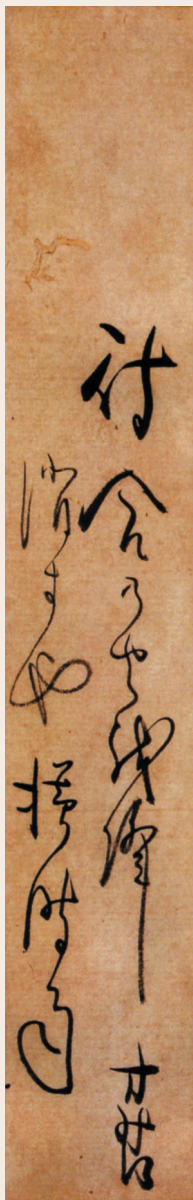
(1)



(2)



(3)



(4)

